
Side"**自由**"

微糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Side”自由”

【Nコード】

N3709U

【作者名】

微糖

【あらすじ】

とっても自由な空賊のお話。

（前書き）

思いついて、なんとなく文章にして、なんとなく投稿。息抜き程度なので、過度な期待はしないでください。まあ、こんなストーリーリリーじゃ期待したくてもあれですよ……。

「あっちい……。」「

「あついですね。」「

「ですね。じゃねーよ！！あっちいんだよ！何とかしろよ！してくださいー！」「

「私にできることはファイアーボールにそれから」「いや……もういいです。」「

「お前に聞いた俺がアホだったわ。」「

「そもそも火のメイジである私に何を求めているのか。」「

「いやさ、お前副船長じゃん？んで俺船長なわけだ。俺のほつが上だろ？だからなんとかしろよ！」「

「なんという理論……。暑さでおかしくなりましたか？つと、よく考えれば寒くても同じようなこと言っていましたね。」「

「え？何？つまり俺の頭は普段からおかしいって言いたいの？やる？ガツンいくよ？」「

「遠慮しておきますよ。余計暑くなりそうなので。」「

「だよな。もう脱ぐもんねーそこっちは。」「

とある船の一室。そこにいる2人の男達の会話である。片方は物腰の丁寧な金髪の男。ある程度金髪を短くし、ローブを着込み、さわやかな印象を抱かせる。顔立ちはとても端正で、常に微笑んでいるように見え、何もしていなくても、気品が伝わる好青年である。もう一人は、汗だくになりながら、生まれたままの姿を惜しげもなく晒しだし、椅子に偉そうに座り込んでいる男。髪の毛は伸び放題のボサボサ。顔の半分を隠すほど前髪が長く、それが余計に暑さを助長させている。

「なあレオ。」

「なんですか？」

「ガリアって今涼しいかな？」

「どうでしょうね。わからないなら行ってみればいいのでは？」

「それもそうだな。なんか去年も同じようなやりとりしなかったっけ？気のせい？」

「ふふっ、どうでしょうね。」

「絶対やったよな。お前涼しいか涼しくないかわかってんだろ？」

「さあ、どうでしょうね。」

「ぶーぶー。まあいつか……迷ったらとりあえず行ってみればいい。進路ガリアに変更。レオそう言ってきて。」

「はいはい。ふふつ。」

「バルフレアいる？」

先程まで、男二人だった部屋に、女が入ってくる。綺麗な赤い髪をある程度のショートカットに整えた、

綺麗な女である。落ち着いた雰囲気纏った、スレンダーな女がノックもなく入室するが、ここで思い出していたきたい。

この部屋の2人の男のうち、一人は物腰の丁寧な好青年。もう一人は汗だくになりながら、生まれたままの姿のまま文句を言い続けるボサボサの髪の男。

生まれたままの姿と言うことは、当然何も身に纏っていないということであり、つまりは男の半身ともいえる部分も、惜しげもなく晒しだしているということであり……。

「「……。」」

しばらくの間、バルフレアと呼ばれた男と、赤い髪の女の視線が交わる。時間が止まったかのように、お互い微動だにせず見詰め合うが、赤い髪の女が視線を下に移し、この均衡をやぶる。

「「……ぷつ。」」

視線を下に移し、小馬鹿にしたような笑いをし、どうでもいいとい

った態度を取り直し、話を続けようとするが、笑われた側としては、これは決して、決して許されない事態であり、当然のことながら許容の範疇を超えた出来事である。

「……何故笑った？」

「何故って……まあいいわ。早くその粗末な息子をしまいなさいよ。」

「おい、粗末って言ったか？」

「粗末って言うか……まああんまりこういうこと言うのはよくないわね。うん。」

「何が言いたい？ 気になるだろ。言いたいことははっきり言えよ！」

若干半泣きになりながら、何故笑ったのかを問いただす男。もう答えはでている。ある程度生きてきて、ここで何故笑われたのかわからなければ、それは色々と問題がある。それでも認めたくない一心で、嘘でもいいから否定の言葉を吐かせたくて、涙を堪えながら問いただす。

「いいから、見ているだけでかわいそうになる物をさっさとしまいなさいよ。」

「……。」

「そうそう！風石の魔力が切れそうなのよ。あんたちちゃつと補充しないと、仲良くあの世行きよ？」

「か、かわいいそうじゃないもん！！レオにはそんなこと言われたことないもん！！なあレオ……俺哀れじゃないよな？な！？」

女の話などまったく聞かず、ショックで言動も若干先ほど変わってしまったっている男。周りと比べると、少しだけ、ほんの少しだけ小さいかな？つと、自分でも半ば気づいてはいたが、まさかここまで言われるとは思わなかった。ショックが大きすぎて、一種のパニック状態にすらなっている。

自分が最も信頼する、部下であり、友であるレオと呼んでいる男に、涙目になりながらすがりつく。現在、その部屋は、全裸で汗だくな男が、涙目の上目遣いで男に詰め寄るといふ、謎の気持ち悪い構図となっている。

「……。」

黙して語らず。レオと呼ばれる好青年は、何かを悟ったような表情で、窓の外の空を見つめている。

「そんな……ばかな……。」

「まあ……かわいいじゃない。私は嫌いじゃないわよ？……ぷっ。」

「黙れ！お前だつて貧乳じゃねーか！そんなもんじゃ俺の息子は反応しないんだよ！魅力的な女を見たら、お前なんか言葉を失うくらい立派に成長するからなこいつは！」

「おい、今なんて言った？」

『貧乳』と言われた途端、女の目付きが変わり、まるでこれから戦場にでるかのごとくギラつく。

「あん？なんだ？もしかしてまだ気にしてたんですか？あっはっは。人のこと馬鹿にしないと、自分が馬鹿にされた途端これですか？」

——ヒタッ

音もなく、自分の大事な大事な半身に、何かが突きつけられる。それはとてもひんやりとしていて、その冷たさがある種の恐怖を生んでいる。視線を下に落とすと、女が持つには大きいようなナイフが、今にも自分の息子を切り落とそうと突きつけられている。

「……そぎ落とすぞ。」

——ヒュッ

「すみませんでしたあー！」

女から発せられるとは思えない声で脅すと、男は全裸で華麗にバク宙を決めながら、着地と同時に地べたに頭を全力でこすり付けた。

「はぁ……それで、話の続きだけど、あんたさっさと行って魔力貯めるだけ貯めてこないと、船員もろとも死人になっちゃうわよ？」

「いや……俺この前貯めたばっかじゃん？あの時めっちゃ魔力貯めたよ！？お前等ちよつとは自重して飛ばせよ！！」

「お前が言うな。」

レオと赤髪の女が綺麗に声を同じにする。

「なんだよ！俺のせいだって言いたいのか！？」

「あんたこの前も「俺はジェシカちゃんに会うんだぁあああ」とか言つて、勝手にトリステインまで船飛ばしたじゃない。」

「いや、あの時はどうしてもジェシカちゃんに会いたくて……。」

「そのジェシカちゃんに会う前には、ゲルマニアまで船を飛ばしましたよね？なんでも「ゲルマニアで最新のアクセサリをプレゼントして、ジェシカちゃんとイチャイチャするんだぁあああ」でしたっけ？」

「プレゼントは基本中の基本じゃん？そんなんでジェシカちゃん笑ってくれるんだよ！？こんな良いことないじゃん！」

「そのプレゼント代も、この前適当に襲った貴族から奪った金のほとんどをつぎ込んでくれちゃったしね？」

「ちょっと待て！お前等何にもしなかったじゃん！！ほぼ俺じゃん！！お前等俺だけ投下して、船飛ばして逃げてったじゃん！」

「まあその話は置いておいて「置いておかないでよ！俺死ぬかもしれないかったんだぞ！？みんなの船長バルフレアは死線を彷徨ってたんだぞ！？」まあまあ。」

「まああの時はね……。うん。悪かったわよ。お酒も入ってた……。なんかそうしたほうが面白いみたいな空気になっちゃって……。ねえレオ？」

「そうですね。船員もみんな笑ってましたからね。」

「お前等本当に人か！？船長が死線彷徨ってるの見て笑うとか……。ちくしょおおおおおお。」

「いいじゃない。あんたどうせ殺しても死ななそうだし？」

「死ぬよ！？悪いが普通の人間ですが！？何か文句でも！！！！？」

「もうなんでもいいから早く魔力貯めてきなさいよ。あんたにはそれしかないでしょ？ほらほら、がんばれ！バルちゃんはやればできる子ですね。いい子いい子。」

「……アリアよ。」

「何？」

「いつか……いつか絶対バルフレア船長って敬意を込めて呼ばせてやるからな！覚悟しとけ！！」

「はいはい、バルフレア船長がんばって。」

なぜここまで扱いが酷いのか。思い返してみれば、この面子を集めたころからこんな感じだった気もする。その時のことなど、あまり思い出せないが、ともに船長と呼ばれた記憶がないことから、きっと最初からこんな感じであつたのだろう。

「はあゝめんどくせえ。」

「なんだかんだ文句を言いつつも、やってくれるところは好きよ。」

「やらないと死ぬしな。てか貧乳に好かれたところで「今日砥いだばかりだから、切れ味は保障できるのよね。」迅速に補充してきます！」

アリアは先ほどのナイフを取り出し、切れ味を確かめるかのごとく数回振る。それを見て、息子がキュツつとなりながら、服も着ないで、杖だけを握り締め、風石が置いてある場所へと向かう。向かう途中、船員達から次々と声がかかる。

「ちっちゃー！え、まじ？ありえるのかあんなの！？」

「おいバルフレア、この前の賭けの金まだもらってねーぞ。早く支払え。」

「ケケケ、船長……あんた……地獄に落ちるよ？」

「よいかバルフレアよ。見るのじゃない、感じるのじゃよ。」

まったく統率の取れていない、よくわからない仲間達に見送られ、風石にありつたけの魔力をつぎ込み、一仕事を終え、船のデッキにでる。

そこから見える景色は、一面の雲と青い空、それにバルフレアを焼き尽くそうと輝き続ける太陽。

「あつちい……。」

大の字になって、デッキに倒れこみ、輝き続ける太陽を見上げる。

「あーあー、みなさーん聞こえていますかー？」

不意に、バルフレアはデッキで独り言のように、言葉を紡ぐ。この独り言は、バルフレアの魔法により、風に乗り、船員の耳に届くよ

うになっている。

「本船はこれよりガリア王国を目指して発信します。理由はあるからでーす。暑すぎて死にそうなので、ガリアに涼みに行こうと思います。ガリアが暑かったら、その時は、一番涼しい場所探しに色々回ろうぜ。どうせお前等みんな暇だろ？」

—— おお おお おお おお おお おお

この船にいる、30人ほどの船員が声を上げているのがわかる。風が震え、それがバルフレアに伝わる。

「それでは魔力も貯めたばっかだし……野郎ども、追加の魔力忘れんなよ？ガリアに向けて全速前進！」

直後、先程までゆったりと飛んでいた船が、ものすごい速度で飛び始める。

「いいねー。風も気持ちいいねー。だけど熱風だわ……。涼しいけど暑い……。不思議な感じですな。あっはははははは。」

デッキで高笑いしながら、船の速さを楽しみつつ、雲の海と青い空と憎たらしい灼熱の太陽を堪能しながら。

ここハルゲニア大陸で、とある有名な空賊たちがいる。

この空賊団、何故有名なかと言われれば、平民もメイジも関係なく、対等な関係と言うのもあるだろうが、一番は『理解不能』という単語が当てはまる。

彼らは、一般の空賊らしく、略奪もする。それは、貴族も平民も関係なく、時には各王家と懇意にしている貴族の屋敷すら、平気で襲い掛かる。

これだけ聞けば、恐ろしい空賊として名を馳せていそうな物だが、実際にはそれだけでは語られない。

ガリアの貴族を襲った2日後、なぜかトリステインで農業を手伝っていたとの報告、まったく面識のない貴族の屋敷を、船員全員で訪ね、晩御飯をねだり、当たり前だが断られると、全員でトボトボ帰っていくなど、行動がさっぱり読めないとして、非常に有名な空賊たち。

実際には気まぐれや、賭けなどのくだらない理由からなのだが、これらの行動が、逆に妙な恐怖心を抱かせる、一言では語りづらい空賊団。

どの船よりも早い船に乗り、自由に各国に無断侵入し、謎の行動をして消えていく。

その中でも最も理解できないと言われているのが、船長”天風”のバルフレアである。

かつては、幼いころから天才の名を欲しいままにした、元トリステインの貴族であり、風のメイジである。魔法隊の隊長すら確実視されていたはずの男が、家が没落したとは言え、空賊に身を落とすなんてことは、考えられなかった出来事である。その事実が知れ渡った時は、トリステインの貴族たちは頭を抱えたものである。

だが、バルフレアをある程度知った者たちからすれば、これは必然だと断言できる。

なぜなら彼は、何よりも自由であり

「暑すぎるな……。火傷するぞこれ。……あれ？これ息子火傷すれば、腫れ上がって大きくなるんじゃない？試す価値あり……だな！」

誰よりも馬鹿であるのだから。

（後書き）

続くかどうかわかりません。まったく考えてません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3709u/>

Side"自由";

2011年6月26日13時02分発行